

第23回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

湧雲迫る

村上 敏幸（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

まず、何ととっても全体の構成に隙がない。手前の山波の線、その間に浮遊する白雲の配置と量、更にそれらの全体を引き締めて立つ富士山のみごとき、美しさは入賞作品中、随一といえる。乱雲の配置も良好で、さらに富士の爽やかさは、散乱する雲から一段とぬきん出て美しく爽やかである。他の雲と富士山との対照と配置も文句のつけ様なく、文句なく第一等の作と認めるにやぶさかでない。格調高く、これぞ富士山！と認めるに何のためらいもない名作であると思う。

推薦

笠雲眩しく

奈木 正次（山梨県大月市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

ややピントが甘いのが残念であること、これはカメラブレによるものなので、撮影時にもっと細心の注意を払う必要がある。色彩も、もっと引き締めることが大切で、さすれば見違える程感じが変わると思う。撮影時のカメラ保持にもう少し慎重さが欲しい。

推薦

列風に雪煙の舞 高橋 英子（東京都大田区） 高川山



白簾史朗氏講評

女性とは思えぬ力に充ちた作品といえる。堂々たる山体の描写、陰影に富んだ切り取り、美しい調子、まさしく富士山の性格を余すところなく描写し尽くしている。山体左方に湧き昇る雪煙と富士のお額に線引く影、全体の陰影、山体の配置、どこと云って欠点の見られぬ完璧な構図、力に充ちた切り取り、富士山の美を代表する名作といえる。

特選

湧き上がる雲の上に 愛澤 和弘（埼玉県所沢市） 小金沢山



白簾史朗氏講評

いかにも新緑の候を思わせる爽やかな描写といえる。手前の山尾根が雲の白さを際立たせ、富士山を高く描写した。やや軽い画面であるため、全体をもう少し調子を整えた方が更に良くなる。

特選

秋色に染まる彼方に

内藤 均（山梨県南アルプス市）

ハマイバ



白簷史朗氏講評

右手前から画面全体にかけて秋色の巨樹を全体に広げ、左遠方に新雪の富士を小さく入れ込んでいる。巨樹と富士山の比率の大小、紅葉と蒼空のコントラストがまことに鮮やかであり、色彩的にも構図的にもすぐれたものとなっている。

特選

荒れる予感

大戸 康世（山梨県大月市）

岩殿山



白簾史朗氏講評

全体的な構成はまとまっており、色彩的にも鮮明である。ただ、富士山頂にかかるレンズ雲の二重が、ことに下方の雲が山頂にはりついている感じが構図をきゅうくつにしているのが残念に思われる。色彩的に少し濁りがあり、それがなければもっとすっきりしただろう。少々残念である。

入賞

朝霞の上に夏富士起つ

伊世井 恒男（神奈川県足柄上郡）

雁ヶ腹摺山



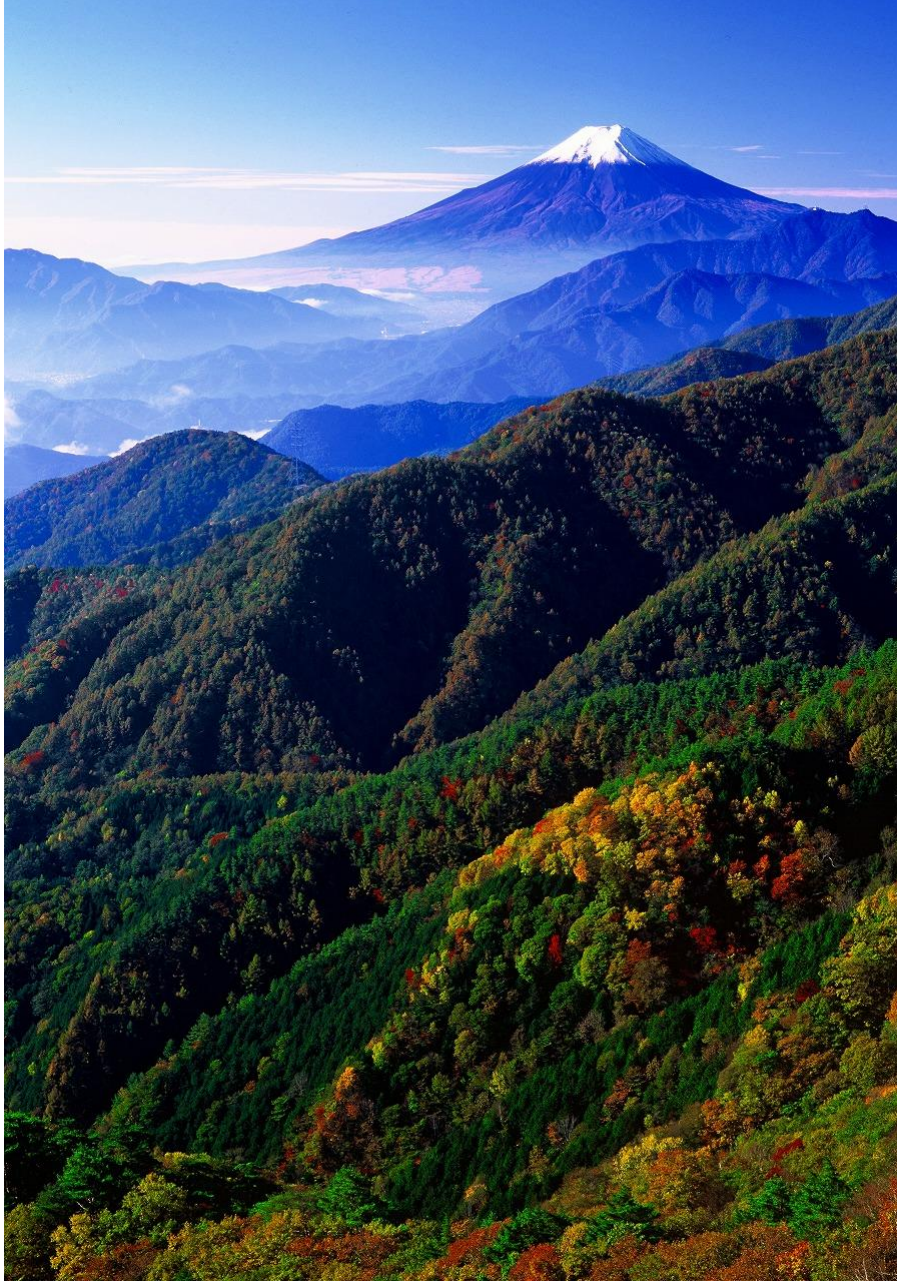
白簾史朗氏講評

題名が典型的であり、インパクトに乏しいのが残念！これは、朝霞ではなく「朝の大気中に立つ」とした方が無理がない。或いは「来明富士見ゆ」でもよい。あまり霞はないからその方が良いと考える。それから題名はなるべく簡潔にした方が印象が強い。



入賞

山並の彼方に 天野 喜夫（神奈川県相模原市） 姥子山



白簾史朗氏講評

あまり何も彼も入れ込んだ感じが逆に印象を弱くしている。一番下方の尾根は平らに走っているため、高さの感じを減じる逆効果となっているので、一番下方の横に走る尾根は切り落とした方がよく、紅葉鮮やかな尾根を少しアップにして構成すると簡明に効果が出る。

入賞

夜明け前 池田 浩樹（山梨県大月市） 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簗史朗氏講評

題名通りの画面にするためには、なるべく簡潔に画面を整理する必要がある。下方左端の樹木は切り捨て尾根筋と朝もや中心に構成する方がすっきりする。もう少し暗く画面を仕上げた方が、朝、夜明け前のムードが表現され、よりその感じが表現されたと思う。画面全体をもっと暗く重厚に仕上げても、その感じに近くなったと考える。

入賞

秋さわやかに 小谷 哲朗（三重県松坂市） 小金沢山



白簾史朗氏講評

題名が少々、作品にそぐわない感じがあるのが残念。画面の調子が少々題名にそぐわない点もある。こうした場合は、もっと明るい画面とし、下方の暗い山を切り捨てる工夫を考えたい。題名に爽やかに、が出たら画面にもその感じがないとそぐわなくなる。下方を大きく切って富士山のみでまとめ、画面を明るく表現しないと損である。

入賞

ミネカエデ色づく頃 内藤 均（山梨県南アルプス市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

色彩の対照としてはまことに美しい。いかにも秋の好天を思わせる条件で美しい作品といえる。ただ、少々全体の感じが弱いのは被写体かつ全体が小さく写り込みすぎているからで、ここは画面下方三分ノ一、左右を各々、紅葉いっぱいカットすることによって、より華やかでいかにも深山の秋酣わといった感じとなる。すべてを入れ込むのではなく、不要な所をカットすることも大いに必要なのである。

入賞

彩る秋

天野 喜夫（神奈川県相模原市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

少々周囲に無駄があるため周囲をカットした方が良い。前作・内藤氏の紅葉作品に比してやや淋しく、画面に空間がありすぎる。こうした場合、思い切って紅葉を入れ込まないと、どこか足りない点が見えてくる。この作品は割とスッキリとなったが、これは紅葉の配置が良かったことと、モチーフが揃ったためである。秋空にすっと立つ富士、真紅の樹葉。まことに美しい。下方が少し重い、紅葉と青空がそれを補って余りある佳作。

入賞

初冬の朝 奈木 正次（山梨県大月市） 滝子山



白簾史朗氏講評

この彩られた山は富士山である。朝焼けに燃える富士山こそ、大自然の中の華である。地吹雪が朝日に映えて全体が燃える、これこそ大自然の巧まざる美の結晶である。レンズの焦点距離が少し足りなかったため、富士が小さいので周囲をカットしたい。これで正しく富士山が燃え上がった。大自然の華である。

入賞

堂々たる富岳高し

愛澤 和弘（埼玉県所沢市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

やや平凡ではあるが、それだけにスッキリとした画面となった。やはり富士山はそのまま素直に表現した方が良い。右手前の柔らかなカヤトの山頂、それに対応する雪白い富士山！やはり富士山には余分な飾りは必要ない。このスッキリとした爽やかさこそ、富士山の真骨頂といえるものだ。

入賞

奇雲の下に 高橋 英子（東京都大田区） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

朝焼けに赤く染まった富士山。その上にたなびく、同じく暁の色に染まった朝雲が呼応する。対応する美の極致、他には何も要らない。単純こそ極致を表すということばそのまま、大自然がそれを私たちに示してくれている。それにしてもなんと美しい山、何という表現美であろう。



入賞

朝霧漂う 村上 敏幸（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

富士山を対象にすると前景が広すぎて間が抜けた構図となるので、ここはトリミングするとまとまってくる。左上方の雲は半分だけ入れ込み、富士山の笠雲と対応させると、上空・下界のバランスも丁度よくなる。すべて構図は、それぞれの部分に於いてバランスが必要であり、この画面では陽の当たった富士山に対して左方の雲、影の部分はその中に溶け込んでいて光の当たらない雲が対応する。だが、陰の部分が大きすぎ、上空とのバランスがとれないので、下方と左方を大きくトリミングした方が良い。それによって全体のバランスが整ってくる。

入賞

豪雪過ぎて

村上 敏幸（山梨県大月市）

百蔵山



白簾史朗氏講評

村上敏幸氏の入賞「百蔵山」は、やはり下方の陰が大きすぎることで、富士山と鹿留山との光が釣り合わないため、左右と下方を特に大きくカット、これで全体のバランスが釣り合いがとれてくる。

入賞

雲間の富士 高津 秀俊（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

高津氏の岩殿山の富士は、富士山も大きく、堂々としているが、まだ下方の面積が大きすぎ、その割に光の量が少ないので、思い切って下方半分詰め、富士山にかかる横線の雲を強調した。これで全体が大きく表現される。その分、左右と下部をトリミングする必要があった。

入賞

お伊勢山の春

大戸 康世（山梨県大月市）

お伊勢山



白簾史朗氏講評

大戸氏のお伊勢山はサクラの花は豪華であるが左方に花が少なく、ここから力が抜けてしまっている。したがって左方の空きを詰めて全体のバランスをとった方が良い。富士山も大きく表現され、サクラの花も豪華になったと思う。

入賞

川霧静かに漂う

愛澤 和弘（埼玉県所沢市）

倉岳山



白簾史朗氏講評

入賞の愛澤氏の倉岳山の富士は、ちょっとノッペリした感じがムードをこわしている。富士山も真中に位置しているので安定はあってもムーヴ（動感）が失われた。光が平板なため、下位に甘んじた。

入賞

紅に輝く 村上 敏幸（山梨県大月市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

同じく入賞の村上氏の朝富士は全体のバランス、朝の色調は素晴らしい。だが、モチーフをやや入れ込みすぎであるので、左右と下方を少しずつトリミングした方が良い。そうすることによってバランスがとれて一段と光が生きてくる。

入賞

晩秋の朝 奈木 正次（山梨県大月市） 御前山



白簀史朗氏講評

奈木氏の御前山の富士山は、手前の谷の陰が深すぎ、尾根の線が生きて来ない。したがって横位置にするより致し方ないが、光が廻って山肌の紅葉が見えてくれば、谷も表現されてすべてが生きてくる。時間的にもっと陽が高く昇った時間帯のものが欲しい。

入賞

飛翔

池田 浩樹（山梨県大月市）

高川山



白簾史朗氏講評

池田浩樹氏の「飛翔」では、雲がそれほど躍っていない、題名にそぐわない。おまけに山上に重い雲があるので印象が暗い。もっと躍動する雲が欲しい写真だ。



入賞

泰然と座す 志村 孝之（神奈川県秦野市） 清八山



白簾史朗氏講評

志村孝之氏の清八山「泰然と座す」は座の露天であるため、座の字ではなく坐を使いたい。それに笠雲がある場合、泰然ということばも似合わない。泰然、ということばはもっと隙のない構図、調子のよい作品にこそ欲しいものなのである。

入賞

雲海の上に優然と

山下 政明（神奈川県秦野市）

本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

山下氏の作品も題名がそぐわない。雲海の上に優然とは、優然を泰然とした方がよく、それも、もっと大きく入れ込みたい。これではあまりも平板で題名にそぐわないと思う。

## 総評

審査員長 白簾史朗

応募作品数、計28名146点、撮影者各自が渾身の力を揮っての力作。審査にも思わず力が入る。富士山を狙う20の山、無数の撮影点があるとはいえ、好展望に恵まれた山、そうでない山頂や山腹から、その時々条件もあって、いくら渾身の力を揮っても、理想の富士が撮れるとは限らない。それはプロを自任する私たち、それを職業としているプロ写真家をもってしても容易なことではない。

ことにこのコンテストに応募される皆さんは別に仕事を持ち、その合間を利用して、天候を見定めて山に登り、好天・悪天に関係なくシャッターを切らなければならないハンディがある。そうした制約の中で尚、これだけの作品をものするには生半可な覚悟では到底追い付くものではない。

だが、応募作品を一覧するだけで、全員が決死の覚悟で富士に対していることが一目で理解できる。私たちプロであっても、ともすれば、ついその辛さから中途半端な気持ちでシャッターを切ることがあるが、ここに応募された146点の作品には、そうした中途半端な覚悟というもの最初から髪の毛ほども見当たらない。まさしく決死の覚悟で早暁から起きて山に登り、苦しい中に“富士は見えるか？”という不安に苛まれながら山頂に至るであろうことが歴然と見てとれる。

いつも云うことだが、写真を撮ることは、その対象との決闘である。中途半端な気持ちで富士山に対した時点で、すでに完敗といってよい。富士山と撮影者は、相見合う前から決闘の場に足を運んでいるのであって、一瞬の気のたるみが、自らの屍をすでに野にさらしているのと同様である。

一瞬の判断もなく、その一瞬一瞬に相手の隙を狙っての決闘と同様である。その気魄が相手を圧倒してこそ勝利を得るのである。今回の作品も撮影者がそれぞれの気魄を以って富士山を圧倒し去った、ともいべき出来栄と見た。そして、来期もまた今回に劣らないすばらしい富士山を見せて欲しいと心から望んでいる。

応募者の皆さんに富士の微笑みをもたらせる報福を祈って・・・・。